

F.T. 2015年卒 地域マネジメントコース

こんな学生時代を過ごしました

私の地元は福岡県宮若市で、中学時代に市民ミュージカルに参加したことをきっかけに「まちを元気にする人になりたい」と思うようになり、一般入試を経て入学しました。

電車を乗り継ぎ往復3時間の通学をするそんな私は、実習中心の学生生活を送っていました。1年生の前期は自転車の大会運営の実習で、協賛を募るために企業への電話営業と訪問をしていました。何度も断られる恐怖と戦いながらも協賛を獲得し、チームへ貢献できたことは、責任とやりがいを教えてくれました。後期から3年までは、猪倉農業関連プロジェクトで活動を行ってきました。

当初、どちらの実習も希望とは異なり、戸惑いがありました。しかし、地域に出て多くの方々と関わる中で、その認識は大きく変わります。何をやるかではなく、学生を受け入れ、学びを提供して下さる方々の思いに対して「学ばせていただく」という視点で取り組むことが大切だということでした。「やりたいこと」だけを追うのではなく、与えられた環境でいかに考え、深く学びを得るかということに気付くことができた経験でした。また、私は東日本大震災関連プロジェクトにも参加し、被災地の現実を目の当たりにしてきました。被災者の方々の声を聞く中で「新聞は災害時に貴重な情報源である」ということを知ると同時に、世の中に伝えていく必要性、そして読者にどう届け、読んでもらうのか、といった価値の提供に関わる仕事に携わりたいと強く思うようになりました。この経験が、新聞という媒体を通して社会に貢献したいという、卒業後のキャリアを決める大きな転機となりました。

実習以外では、演劇サークルで活動をしたり、友人たちと地元の特産品を持ち寄った「地元じまん物産展」を企画して各地を巡回したりしたこともありました。楽しいことも、苦しいことも、仲間と過ごした時間はいい思い出となっています。

卒業後こんなキャリアを歩んでいます

私は2度の不採用を経験しましたが、新聞を通して地域社会に貢献したいという強い思いから、3度目の採用試験を経て2016年に西日本新聞社に入社しました。

最初に配属された販売部では、日々新聞販売店を訪問。新聞の配達・維持・管理の業務に携わりました。担当エリアでの豪雨災害も経験し、災害発生時でも情報を止めずに新聞を届けるという、新聞社の使命の最前線に立ちました。入社5年目の2020年からは企画開発部、2021年からのこどもふれあい本部では親子向け紙面の制作や教育コンテンツの開発、出前授業なども行ってきました。2023年からは新設のデータマーケティング部に異動。現在、部署名が変更し、お客さまセンターで顧客データの収集と分析、マーケティングから商品開発、新聞社のプロモーション、知的財産の活用といった幅広い業務に取り組んでいます。現在、特に私が力を入れているのが「新聞紙とでんぷんので作る新聞ばっぐ」の取り組みです。読者向け講座から、制作キットの開発・販売、デザインを活かす新聞広告の営業など、他部署と連携した取り組みへと広がっています。

新聞の部数は減少傾向ですが、世の中にとって必要不可欠な存在です。「わたしたちの九州 西日本新聞社は地域づくりの先頭に立ちます」という企業理念のもと、地域主権のジャーナリズムを堅持し、暮らしに役立つ情報を発信し、魅力ある地域づくりに貢献できるよう日々奮闘しています。

現役生へのメッセージ

学群での学びは、答えのない課題に挑む「タフな精神」と「現場に入り込む力」を培ってくれました。学生時代に経験した一つひとつの挑戦と、そこでの試行錯誤が、社会に出た私の成長を力強く後押ししてくれる土台となりました。社会に出ても、自ら課題を見つけ、解決へと導く主体的な姿勢が求め続けられます。立ち止まることがあっても、また次の一步を踏み出してみてください。皆さんの挑戦を心から応援しています！

(2025年11月30日執筆)



耕運機で猪倉の畑を耕している様子です。夏は授業の合間に水やり、雨や雪のなかでの農作業。とにかく鍛えられました！



読者向けの新聞ばっぐ講座で講師を務めている様子です。読者の皆さんの声を直接聞き、常に顧客目線で仕事をすることを大切にしています。